遠回りな人生を君と

ゆうほ

登場人物

杉本未央（12）（15）：中学3年生

北野翼（12）（15）：中学3年生

森田大輔（15）：中学3年生

木橋先生：未央と翼の担任教師

石梨先生：未央が通うバレエ教室の先生

利用者A～C：中央図書館の利用者

女子生徒A、B：未央と翼のクラスメイト

図書館職員：中央図書館の職員

中学校の先生：森田の担任教師

○中央図書館・外観（夕）

T「1998年・3月」

クリーム色で3階建ての建物。

空は厚い雲で覆われている。

正面玄関はガラス張りの自動ドア。

ドアの横に「中央図書館」と書かれた看板がある。

正面玄関の端には時計と公衆電話がある。

○同・駐輪場（夕）

入口に「中央図書館駐輪場」と書かれた小さな看板がある。

強い風が吹いて、落ちていた葉が舞う。

雨が降り始めて、一瞬で大雨になる。

駐輪場の中から、杉本未央（12）が自転車を押しながら飛び出してくる。

○同・正面玄関の端（夕）

未央は軒下に自転車を停める。雨の勢

いが更に強くなる。

未央、背負っていたリュックを地面に置く。リュックを開ける。

未央「良かった。濡れていなくて」

未央、ため息を吐く。眼鏡に付いた水滴を拭う。

未央の服のポケットから、図書館の貸出カードが落ちる。

カードに「杉本未央」と書かれている。

未央「（空を睨みつけながら）雨が降るのは、夜遅くになってからだろう――」

未央、カードを拾う。

○同・館内の貸出カウンター前（夕）

近くにある窓に、雨が強く叩きつけられている。

貸出カウンターの前に、数人の利用者が並んでいる。

北野翼（12）が列の先頭にいて、窓の外を見ている。

翼「土砂降りだな」

翼、顔を正面に戻す。

翼の順番になる。

図書館の職員、本にスタンプを押す。

本を翼に差し出す。

翼、本を受け取る。職員に対して無言で頭を下げる。身体の向きを変えて歩き出す。

翼「傘を持ってきて良かった」

翼、顔を下に向ける。

館内に「蛍の光」と、閉館を知らせる館内放送が流れる。

○同・正面玄関の端（夕）

雨が強く降っている。

雨水が雨どいを大量に流れ、（濁流のようになって）排水溝に吸い込まれていく。

公衆電話を利用者Ａが使っていて、大きな声で喋っている。

未央、利用者Aを横から見ている。

利用者A「とにかく、早く迎えに来て！」

利用者A、受話器を叩きつけるように置く。中から出てきたテレホンカードを強引に取る。

未央、髪を撫でるように触る。拳をギュッと強く握る。

未央「早く帰りたいのに――」

未央、近くにある時計に目を移す。

時計の針は16時55分を指している。

利用者BとCが館内から出てくる。外に出ると空を見上げる。

利用者B「凄い雨だな」

利用者C「傘を持ってきて良かった」

利用者BとC、手に持っていた傘を開く。歩き始めると未央の方に顔を向ける。

未央、反射的に目を逸らす。唇を噛みしめる。

○同・正面玄関（夕）

時計の針が16時59分を指している。

翼が手にビニール傘を持ちながら、館内から出てくる。

翼、3メートルほど離れた場所にいる未央のことを見る。

未央と翼は2秒ほど見つめ合う。

翼、視線を外す。傘を開いて歩き出す。

未央、頬を膨らませる。踵を上げてつま先立ちになる。

未央M「期待なんてしていないよ。その方がダメージは少ないからね」

翼、5メートルほど進んだ所で立ち止まる。顔を半分だけ後ろに向ける。

未央、大きなため息を吐く。踵をゆっくりと元に戻す。

翼M「そのため息は、はっきり言って迷惑だった。早く帰りたいのに、そんなことをするなよ。僕はそう思っていた」

17時のチャイムが周囲に響き渡る。

未央、顔を下に向けると目を閉じる。

翼、未央の肩を２回叩く。

翼「使う？」

未央、顔を上げる。驚いた表情で翼のことを見つめる。

翼M「多分、気持ちは顔に出ていたと思う。イライラした感情を抑えながら、その時の僕はそう言った」

翼、（無表情で）傘を未央に突き出す。

翼「この傘、使っていいよ」

未央、口が半開き。身体は固まっている。

翼、苦笑する。

翼「傘がなくて困っているのなら、これを使いなよ。俺は家まで走れば１分で着くから」

未央「……いいの？」

翼「大丈夫だよ。こんな安物のことは気にしなくて」

未央「でも――」

翼「雨はまだ止まないと思うよ」

翼、空を見上げる。

未央「あ、ありがとう――」

未央、ゆっくりと傘の柄を握る。

翼、傘から手を離す。軽く息を吸い込む。

未央、傘を持つ手が震えている。

翼、未央に背中を向ける。走りながら図書館から出ていく。

未央、視線を手元に向ける。

傘の柄に「第1小　6年2組　北野翼」と、マジックペンで書かれている。

T「2000年・4月」

○南台中学校・外観（朝）

4階建ての白色の建物。

正門に「南台中学校」と書かれた看板がある。

学校に沿って桜の木が植えられている。

満開の桜が風で揺れて、花びらが舞う

○同・3年生の教室前の廊下（朝）

廊下の壁に名簿が貼られている。

名簿の周りに生徒たちが集まっている。

廊下の端には階段とトイレがある。

北野翼（15）がリュックを背負いながら、階段を上がってくる。

森田大輔（15）がトイレから出てきて、翼に気付くと話し掛ける。

森田「北野、遅いぞ」

翼「まだ5分あるだろう？　朝練の無い日くらいゆっくりさせろよ」

翼、名簿の前に集まる生徒たちを見つめる。

翼「森田、お前は何組？」

森田「俺はB組。お前はC組だよ」

翼「……残念だな。もう一度お前と同じクラスになりたかったのに」

森田、ニヤッと笑う。翼のことを見つめる。

森田「ちなみに、C組の担任は木橋先生だ」

翼「……担任と部活の顧問が同じというのは、流石にしつこいな」

森田「諦めろよ。人生はそういうものだ」

森田、翼の肩を２回叩く。Ｂ組の教室に入る。

翼、苦笑いする。森田を見送るとＣ組の教室に入る。

○同・３年Ｃ組の教室（朝）

生徒が３０人ほどいる。

教室の中は騒がしい。

黒板に「３年Ｃ組座席表」と書かれた紙が貼られている。

翼は手に息を吹きかけながら、教室の中に入る。黒板の前まで移動して、座席表を見る。

翼「俺の席は――」

座席表の廊下側から２列目、前から４番目に「北野翼」と書かれている。その後ろには「杉本未央」と書かれてい

る。

翼、振り返って自分の席を見る。

翼「あの席か――」

翼の席の右隣には女子生徒A、前の席には女子生徒B、後ろの席には杉本未央（15）が座っている。

未央は小学生の時と違って、コンタクトレンズを着用している。

翼、自分の席に座ると肩をすぼめる。

未央、本を読む仕草をしている。一瞬だけ翼を見ると視線を元に戻す。

女子生徒A「北野君おはよう。また一緒のクラスだね」

翼「（よそよそしくて、怯えたような態度で）おはようございます。よろしくお願いします――」

翼、膝に手を置く。女子AとBに笑顔を向ける。

女子生徒B「今日はいつもより遅いけど、陸上部の朝練は無いの？」

翼「うん。始業式の日はいつも無いよ」

翼、女子Bに軽く頭を下げる。後ろの席に座っている未央を一瞬だけ見る。

未央、本をゆっくりと前に倒す。

未央M「2年前、図書館で傘を譲ってくれた男の子。彼が同じ中学校の同級生だということに、私は1年生の時から気付いていた」

未央、顔を上げて翼の背中を見つめる。

未央M「だけど、クラスや部活が違ったから話し掛ける切っ掛けが無かった。近くにいるのに、私は一度も翼と話を下ことが無くて、彼も私に声を掛けてくれなかった」

未央、本で顔を覆う。

○同・外観

空は厚い雲で覆われている。

強い風が吹いて、木々が揺れる。

○同・3年C組の教室

生徒たちは少し緊張した面持ち。全員

が前にある黒板を見つめている。

木橋先生、（睨むような表情で）生徒たちを見回す。

木橋先生「先生はくじ引きで席を決めたかったけど、あなたたちを信用して自由にします。授業中に騒いでいたら、すぐに元に戻すからね」

生徒たち「はい！」

生徒たちは大きな声で返す。

未央、頬杖をついている。口を小さく動かす。

未央「やれやれ――」

生徒たちは一斉に立ち上がる。笑顔になって動き出す。

未央、席に座った状態で周囲を見る。

翼、ゆっくりと立ち上がる。窓の方に移動する。

未央「（翼を目で追いながら）あー、残念」

未央、深呼吸をする。

翼、窓の近くで空いている席を探して

いる。

未央、机に手をついて立ち上がろうとする。中腰の姿勢で止めて元に戻る。

翼、近くにいる男子生徒と話している。

未央、翼を目で追うことをやめる。

未央の周りに生徒たちが集まり始める。

翼が座っていた席に男子生徒が座り、別の男子生徒を手招きして呼ぶと、未央の周りが騒がしくなる。

未央、小さくため息を吐く。立ち上がる。

木橋先生、腕組みをしている。黒板の上に掛けられている時計を見る。

木橋先生「早くしなさい。下校が遅くなるわよ」

未央、最前列の席に移動する。

未央の右隣の席は空いている。

未央「（小声で）早く終われよ」

未央、頬杖をつく。

未央「何処に行ったのかな――」

未央が窓の方へ顔を向けると、翼が視線の先を横切る。

翼、未央の右隣席の前に立つ。未央の方へ顔を向けると席を指差す。

翼「この席、……空いていますか？」

未央「う、うん。空いているよ──」

未央がうなずくと、チャイムが鳴って教室の中に響き渡る。

翼、席に座る。

未央、顔を下に向ける。

木橋先生「全員決まったみたいね。はい、今日はこれで終わり。先生たちはこの後忙しいから早く下校しなさい」

教室の中が騒がしくなる。

生徒たちの大半は教室を出ていく。

○同・3年生の教室前の廊下

生徒が数人いて、お喋りに夢中になっている。

○同・3年C組の教室

風が吹いて、教室のドアが揺れる。

翼は廊下側から1列目の先頭、未央はその左隣に座っている。

翼と未央の近くには誰もいない。

未央、机の上にリュックを置いている。リュックを左手で掴んでいる。

翼、姿勢は猫背。席に座りながらペットボトルに入ったお茶を飲んでいる。

未央、胸に右手を当てながら頬を膨らませる。口から息を吐き出すと翼を見る。

未央「北野君、北野君」

翼「えっ――。あっ、はい」

翼、顔を未央の方へ向ける。視線は未央と合わさない。

未央「帰らないの？」

翼「今日は部活が無いから。急いで帰る理由も無いし――」

未央、何も言わずに何度かうなずく。

未央「どうして、そんな人気の無い席にしたの？」

翼「ずっと、この場所が定位置だったから」

未央「……そうか」

翼「窓側の席にしようかなと思ったけど、取れなかった」

翼、口角を少しだけ上げる。

未央、机に手を入れる。中にあったプリントを掴む。

未央「（少し笑顔で）このプリント、先生は明日使うと言っていたかな？」

翼「う、うん。言っていたよ」

未央「ありがとう。それなら、このプリントは置いていこう」

未央、プリントを二つ折りにする。机の中へ投げ込むようにして入れる。

翼、口が半開きの状態。未央のことを見続ける。

森田がC組の教室に入ってくる。

森田「北野、帰ろうぜ」

森田、翼の机に両手をつく。

翼、驚いた表情で森田を見る。

未央、立ち上がる。リュックを背負うと教室を出ようとする。

翼、机から身を乗り出す。

翼「杉本さん！　あの、……北野翼です。よろしくお願いします」

未央、ドアの近くで立ち止まる。小さく深呼吸をしてから振り返る。

未央「杉本未央です。よろしくお願いします」

未央、翼に向かって頭を下げる。顔を上げると微笑む。

翼、耳が赤くなっている。ゆっくり息を飲み込む。

未央、素早く身体の向きを変える。教室を出ていく。

森田「何かあったのか？」

翼「……いや、何でもないよ」

翼、ペットボトルをゆっくりと机の上に置く。

森田「お前、またこの場所にしたのか？」

翼「慣れているからな」

森田「へっ、自分で選べる奴はいいよな。俺は強制的に教卓の前にされたぞ」

翼「それはお前が居眠りばかりしているからだ」

翼、苦笑いする。

森田「お前の隣は杉本さんか？」

翼「まあね」

森田、未央の席に座る。

森田「地味だけど、かわいいだろう？」

翼「ああ、2年生の時に同じクラスだったお前が羨ましかったよ」

森田「……惚れたのか？」

翼「いや、それは無いよ」

翼、立ち上がってリュックを背負う。

○通学路

桜並木。

頬が少し赤くなった未央が歩いている

横断歩道の前で信号が赤になる。

未央、立ち止まる。空を見上げる。

未央「暑い――」

未央、手で扇ぎながら身体を冷まそうとする。信号が青になると歩き出す。

○南台中学校・正門前

雨が降っている。

傘を差した人々が行き交っている。

○同・3年C組の教室

教室の中は少し騒がしい。

黒板には大きな字で「自習」と書かれている。

未央、頬杖をついている。

翼、集中力が切れかけている。右手で眼を擦ると教科書を開く。

未央、翼のことを横目で見る。故意に消しゴムを落とす。

翼、消しゴムを拾う。未央に手渡す。

未央「ありがとう」

翼「どういたしまして」

未央、翼の方へ少しだけ身を乗り出す。

未央「ねえ、北野君は休みの日は何をしているの？」

翼「勉強か陸上の練習」

未央「それは一人で？」

翼「まあね。相手がいないから」

未央「森田君は？」

翼「あいつとは月曜日から土曜日まで一緒だから、それ以上はしつこいよ」

翼、手に持っていたペンを置く。未央を横目で見る。

翼「それに、一人でいる方が好きだから」

未央「へぇー、そうなんだ」

翼「……変だと思う？」

未央「いいえ。私も家で引きこもっていることが多いから」

未央、頬を膨らませる。

未央「私、誰かとずっと一緒にいることが苦

手なの」

翼「（半笑いで）それなら、杉本さんは結婚なんて無理だね」

未央「多分ね。……でも、それは北野君も同じだと思うよ」

未央、翼を見ながら微笑む。

翼、視線を逸らす。

5秒ほど沈黙。

翼、周囲を軽く見渡す。未央を見る。

翼「一人の方が楽だから好きだけど、時々愚痴を言う相手が欲しいかな」

未央「それ、多分寂しがり屋だよ。気が合う人が少ないからそう言うの」

翼「……どうして？」

未央「バレエ教室の先生が、私のことをそう言っていたから」

翼、口が半開き。未央を見続ける。

チャイムが鳴る。教室の中にいた生徒たちが一斉に立ち上がる。

○同・3年生の教室前の廊下

生徒たちで溢れている。

森田が廊下を歩いている。

○同・3年C組の教室

森田は教室に入ると翼の前まで来る。

森田、手を合わせて翼のことを拝む。

顔には米粒が付いている。

森田「北野、英語のノートを貸してくれ」

翼「えっ？　何のこと？」

翼、ニヤッと笑う。

森田、（眉間にしわを寄せて）翼を睨む。

森田「おい、いつものことだから分かるだろう？　短い休み時間だから、手間を取らせるなよ」

森田、翼の机を左手で数回叩く。

森田「全く、だからお前はダメなんだ」

翼「（苦笑いしながら）分かったよ。仕方ないな」

翼、机の中からノートを取り出す。森田に手渡す。

森田「ありがとう！　明日には必ず返すよ」

森田、翼の手を強く握る。（ニヤニヤとした表情で）教室を出ていく。

翼、鼻で笑いながら森田を見送る。

未央、翼の肩を叩く。

未央「今の何？」

翼「森田の赤点対策」

翼、背伸びをする。

翼「昨日は国語のノートを借りに来て、明日は数学のノートを借りに来ると思う。テスト前の恒例行事だよ」

未央「……確かに、テスト前だからね」

未央、机に顔をつける。ため息を吐く。

翼、深呼吸をする。未央を見る。

翼「杉本さん、……ノートを貸そうか？　森田は１ページ１０円だけど、杉本さんは初回だからサービスするよ」

未央、翼を見る。ニヤッと笑う。

未央「どうして？　私が授業中に寝てばかりだから心配しているの？」

翼「……、気まぐれだよ。」

未央「本当に？」

翼「本当だよ。それに、いつも仲良くしてくれるから、少しお礼がしたい」

未央、顔を上げる。

未央「それなら、甘えさせてもらおうかな。ノートが穴だらけだったから助かるわ」

翼、机からノートを数冊出す。未央に手渡そうとする。

翼「明日返してね」

未央「今日返すよ」

翼、驚いた表情。未央を見る。

未央「北野君が部活から帰るまでにコピーして、机の中に戻しておくから」

翼「いや……、テスト前だから部活は無いよ――」

未央、翼の方へ身を乗り出す。

翼、（未央の勢いに驚きながら）壁に

背中を押し付ける。息を飲み込む。

未央、上目遣いで翼を見る。

未央「それなら、今日は一緒に帰る？」

翼「えっ？」

未央「途中のコンビニでコピーするから、そこまで付いてきてもらえるかな？」

翼「あっ、……いや、それは――」

翼、眼をキョロキョロさせる。机の下で拳を強く握る。

未央、翼の眼を見る。

未央「ダメかな？」

翼、顔を素早く横に振る。

翼「いや、そういうわけではないよ。俺は構わないけど、杉本さんは時間とか大丈夫？」

未央「私は大丈夫。時間はあるよ」

翼、未央から視線を外す。

翼「わ、分かった。じゃあ、放課後ね」

未央「ありがとう。助かった」

未央、翼に向かって頭を下げる。

翼、握っていた拳を元に戻す。

未央「中学校は義務教育だから、成績が悪くても時間が解決すると思っていた」

翼「……森田と発想が同じだ」

未央「それは嫌」

未央、顔をクシャっとさせて笑う。

チャイムが鳴る。木橋先生が教室に入ってくる。

翼、（自分の身体を冷ますために）シャツの襟をバタバタとさせる。

未央、両手で口を覆う。周りに気付かれないように大きく息を吐き出す。

○同・正門前（夕方）

雨上がりで地面は濡れている。

周囲に中学校の生徒たちは少ない。

○通学路（夕方）

住宅街の中を通る小道。

未央と翼は並んで歩いているが、二人の間には少し隙間がある。

翼、襟元の臭いを嗅ぐ。

翼「ごめん。少し汗臭いかもしれない」

未央「別に気にしていないよ。少しくらい獣みたいな臭いがした方が、違和感は無いと思う」

未央、翼のことは見ないで笑う。

未央「陸上部は熱心だから、今日も練習があると思っていた」

翼「テスト前だからそれは無いよ。杉本さんの方は？」

未央「美術部もテストが終わるまでは無いよ。まあ、私を含めて大半は仕方なく入っている人だから、部活が無いことを気にしている人の方が少ないと思うけど」

翼、目を合わさずに苦笑いする。

翼「まあ、部活は全員参加だからね」

未央「その代わりではないけど、今日もバレエがある」

翼「レッスン？」

未央、無言でうなずく。

翼「テスト前でもレッスンに行くなんて、杉本さんはバレエが好きなんだね」

未央「たまたま今日がレッスンの日だというだけだよ」

未央、小さくため息を吐く。

未央「バレエを死ぬほど愛しているわけではなくて、向いていると思っているわけでもないけど、少しは勝負できると思っているから続けている」

未央、のぞき込むようにして翼のことを見る。

翼、肩をすくめる。軽く咳払いする。

二人の前に一台の飲料自販機が現れる。

翼、自販機を指差す。

翼「この自販機、他の場所より安いよ」

未央「知っている。私もこの道をよく通るから」

翼、驚いた表情。未央を見つめる。

未央「多分だけど、北野君が行こうとしているコンビニは私の家の近くだから、余計な

気遣いはしなくていいよ」

翼「……ということは、杉本さんの家は駅の近く？」

翼、未央の方へ身体を向ける。

未央「そう。駅と第3小学校の中間くらいの場所にある。ところで、北野君はどうしてそのコンビニにしたの？」

翼「森田と一緒に帰る時によく立ち寄るんだ。中学校の近くにあるコンビニだと、知り合いに会うかもしれないし、あいつの家はこの方向だから」

未央、目を細める。

未央「ふーん。ちなみに、北野君は第1小学校だよね？」

翼「そう。中央図書館の近くに住んでいる」

未央「中央図書館か、今でも時々行くかな」

翼「杉本さんの家からだと、少し距離がある よね？」

未央「そうね。だから、いつも自転車を使っている」

未央、小さく深呼吸をする。

未央「2年以上前の前の話だけど、中央図書館で雨が止むのを待っていたら、私に傘を譲ってくれた人がいたの」

翼「優しい人だね。その傘は今でも持っているの？」

未央「……早く返したいと、ずっと思っているけどね――」

未央、一瞬だけ翼を見る。

翼、未央を見ているが無反応。

5秒ほど沈黙。

翼「杉本さんはそんなに本が好きなら、図書委員に立候補すれば良かったのに」

未央「面倒くさいし、高校入試の内申点が欲しいわけでもないからやらない。それに、半分くらいは本を読んでいる仕草だから」

翼「仕草？」

未央「そう。本を読んでいる演技をしているの。読書中という免罪符があれば、面倒なことから逃げられるからね」

未央、歩く速度を少しだけ上げる。

○コンビニ・外観（夕方）

緑、白、青の三色看板の店。

隣には小さな公園がある。

○同・店内（夕方）

未央と翼はコピー機の前にいる。

店内にいる客は未央と翼だけ。

翼、未央にノートを手渡す。

翼「他の人の邪魔になりそうだから、俺は外で待っているよ」

未央「分かった」

翼、足早に店の外へ出ていく。

未央、ノートを開く。

未央「（苦笑いしながら）汚い字――。森田君、この字が読めるなんて凄いな」

未央、ノートをコピー機の上に置く。

コピー機に小銭を入れる。

○同・入口（夕方）

翼が店の外で立っている。

翼、通行人が目の前を通る度に目付きが鋭くなる。

翼「俺は何を緊張しているんだ──」

翼、顔を横に何度か振る。大きく深呼吸をする。

翼が胸に手を当てると、頬を一筋の汗が流れる。

コンビニの自動ドアが開き、チャイムが鳴る。

未央が手にノートとレジ袋を抱えて出てくる。

翼は未央に気付いていない。

未央、背後から翼に近付く。肩を叩く。

未央「お待たせ」

翼、驚いた表情。

未央、ノートを翼に手渡す。レジ袋からコーラを取り出す。

未央「これ、今日のお礼」

未央、翼にコーラを手渡す。

翼、口を微かに動かすが言葉にならない。

未央「そこで飲もうか？」

未央、コンビニの隣にある公園を指差す。

翼、公園の方へ顔を向ける。何も言わずにうなずく。

○コンビニの隣にある公園・（夕方）

面積は学校の教室より少し大きい。

地面は砂利。

水道と三人掛けのベンチが一つある。

未央と翼以外に誰もいない。

未央と翼はベンチの端に座っている。

未央「乾杯」

翼「乾杯」

未央と翼、視線を合わさずにペットボトルをぶつけ合う。

翼、耳が少し赤くなっている。

未央「今日はどうもありがとう」

翼「どういたしまして」

未央、翼の方へ身体を向ける。

未央「今度の中間テスト、何点くらい取れそう？」

翼「英語は少し苦手だけど、それ以外は90点以上取れると思う」

未央「凄いね。北野君は赤点なんて無縁？」

翼「油断は禁物だけど、多分大丈夫」

翼、ペットボトルのふたを閉める。

翼「（ニヤッと笑いながら）実は学年で1位を狙っている」

未央「1位？」

翼「ここだけの話だけど、2年生の時に1位を取ったことがある」

未央「定期テストで？」

翼「そう。本来なら順位は秘密だけど、先生が教えてくれた」

未央「……何それ、自慢？」

未央、頬を軽く膨らませる。

翼「いや、そういうわけではないけど――」

未央「未央ちゃんの中でそれは無いな」

翼、未央に向かって頭を下げる。

翼「傷付けてしまったなら謝るよ。ごめん」

翼、ゆっくりと顔を上げる。視線は定まっていない。

未央、ため息を吐く。

未央「（苦笑いしながら）大丈夫。何も気にしていないから」

未央、ペットボトルのふたを閉める。

翼、小さくため息を吐く。

未央、軽く息を吸い込む。

未央「駅前にある『マ』で始まって、『ド』で終わるハンバーガーのチェーン店を知っている？」

翼「知っている。何度も行っているから」

未央「そのお店のテレビCMに、私は出たことがある」

未央、ペットボトルをベンチの上へ静かに置く。

未央「知っていた？」

翼「……杉本さんが、子役をしていたという噂は聞いたことがあるよ」

未央「色々と縁があってね。もう辞めたから過去のことだけど」

翼「杉本さん……、かわいいからね。」

未央「ありがとう。まあ、よく言われるけどね」

未央、クシャっとした笑顔になる。翼を指差す。

未央「だから北野君は耳が赤くなっているの？私みたいにかわいい女の子と二人きりだから」

翼「えっ？」

翼、慌てながら耳を手で覆うようにして触る。肘がベンチの上に置いていた未央のペットボトルに当たる。

ペットボトルが地面に落ちる。未央の足元まで転がる。

未央、ペットボトルを拾う。ペットボ

トルに付いた砂を手で払う。

未央「はい」

翼「あ、ありがとう」

未央、ペットボトルを翼に手渡す。

翼、視線が定まっていない。手で胸を押さえながら深呼吸をする。

未央「ごめんね。この現場を誰かに見られたら、変な噂が流れるかもしれない」

翼「別に俺は大丈夫だよ。それに、価値が下がるのは杉本さんの方だと思う」

翼、コーラを飲み干す。シャツの袖で口を拭う。

翼「どうして突然過去の話を？」

未央「お返し。北野君が自慢話をしたから私なりのお返し」

翼、ゆっくりと未央の方へ顔を向ける。

未央、顔を正面に向ける。

翼「俺は自慢話のつもりではなかったけど、……杉本さんなら大丈夫だと思った」

未央「そんな友達、……一人くらい欲しいよ

ね」

翼「えっ？」

未央「（苦笑いしながら）何でもない」

未央、コーラを飲み干す。

未央「ちなみに、私の好きなタイプはお父さんだから」

翼「お父さん？」

未央「そう。変かな？」

翼「そんなことないよ。俺が母親をタイプと言えばマザコン扱いされるけど、杉本さんなら無難な切り返しだと思う」

未央、口元を手で押さえながら笑う。

翼、未央を横目で見る。唇を噛みしめる。

3秒ほど沈黙。

カラスの鳴き声が周囲に響き渡る。

未央「帰ろうか。ここに長くいると知り合いに見つかるかもしれない」

翼「……そうだね」

翼、立ち上がるとズボンに付いた小石

を手で払う

未央、立ち上がると翼と反対の方へ顔を向ける。（身体を冷やそうと）顔の近くで手を扇ぐ。

○同・入口（夕方）

夕日が未央と翼を照らしている。

未央、髪の毛を耳に載せるようにして掛ける。

未央「今日は疲れたね」

翼「そうだね、俺も疲れた」

未央、ため息を吐く。

未央「バレエのレッスン、今日はサボろうかな――」

翼「それもありだと思う。一日くらいサボったところで、何も変わらないから大丈夫だと思うよ」

未央「……レッスンといっても簡単で慣れているし、テスト前だから1時間くらいで終わらせようと思っているけどね」

翼「簡単で慣れていることを嫌だと思うなら、多分疲れが溜まっているよ。今日は休んだ方がいいと思う」

未央、小さく笑みを浮かべる。翼の足元を見る。

未央「その言葉、信じてもいい？」

翼「信じる者は、足をすくわれるよ」

翼、未央から視線を逸らす。拳を強く握る。

未央「大丈夫。私も他人の言うことは、半分くらいしか信じていないから」

翼「……捻くれ者」

未央「今更気付いたの？」

未央と翼、見つめ合って小さく笑う。

未央「でも、どうもありがとう。少し楽になった」

翼「時々息抜きをした方がいいよ。肩の力を抜いて、余計なものまで背負わない方がいいと思う。それに──」

翼、握っていた拳を元に戻す。

翼「何とかなる範囲で、一度くらい騙されてみた方がいい経験になると思う」

未央「バカ――」

未央、笑顔で地面を軽く蹴る。

翼、強引に笑顔を作る。

5秒ほど沈黙。

未央、横目で翼を見る。

未央「北野君はカッコいいね」

翼「えっ？」

未央「学校にいる時とキャラが違うから、今まで気が付かなかった」

翼「杉本さんも、かわいいよ」

未央「本気で言っている？」

翼「……うん」

未央「気持ち悪い」

未央、腕を抱えて身体を震わせる。頬が少し赤くなっている。

翼「嬉しくなかった？」

未央「何度も言われてきたけど、悪意が無ければ嬉しいよ」

未央、大きく息を吸い込む。腕時計を見る。

未央「そろそろ帰らないと、レッスンに遅れそう」

翼、無言でうなずく。

未央「バイバイ、また明日」

翼「またね」

未央と翼、小さく手を振る。反対方向へ向けて歩き出す。

翼、少し歩いた所で立ち止まる。後ろを振り返る。

未央、翼に気付いていない。そのまま歩き続けている。

翼「また明日――」

翼、空を見上げる。

○バレエ教室・外観（夜）

灰色のビル。1階にはコンビニがある。

ビルの周辺は人通りが多い。

2階の窓に「バレエ教室　生徒募集中

と書かれている。

○同・応接室・外（夜）

スタジオが廊下の反対側にある。

茶色で木目調のドア。ドアノブに「使用中」の札が掛かっている。

○同・応接室（夜）

こじんまりして、少し古びた内装。

部屋の中には未央と石梨先生がいる。

二人はソファに座っていて、テーブルをはさんで向かい合っている。

テーブルの上にはコップに入ったアイスコーヒーと、オレンジジュースが置かれている。

未央、書類を手に取りながら見ている。

石梨先生、前屈みで座りながら未央を見ている。

未央「私のプロフィール、盛り過ぎです」

未央、苦笑する。書類をテーブルの上

に置く。

石梨先生、アイスコーヒーが入ったコップを手に取る。

未央「練習中に呼び出されて、こんな物を見せられるとは思いませんでした」

石梨先生「早く見てもらいたかったのよ」

石梨先生、アイスコーヒーを氷ごと口の中に入れる。（手で口を押さえながら）口の中に入れた氷を噛み砕く。

未央「私の知らない所で、こんな物が作られていたとはびっくりです」

石梨先生「先週、未央のお母さんにここへ来てもらって作った。あなたにもこの話はしていたと思うけど？」

石梨先生、コップをテーブルに置く。

未央、顔を横に向ける。

石梨先生「何もやりたいことがないから、暇つぶしでアイドルのオーディションを受けてみるのもありだ。未央はそう言っていなかった？」

石梨先生、未央のことを見る。ソファに深く腰掛ける。

未央、深いため息を吐く。石梨先生を見つめる。

未央「お母さん、家では何も言っていなかったですよ」

石梨先生「それはあなたの決断が遅いから。締切りは明後日なのよ」

未央「……書類は提出済みですか？」

石梨先生、首を横に振る。

石梨先生「未央がOKと言ってくれたらすぐに出すけどね。それに、嫌になったら途中で辞退することは出来るから」

未央、書類を手に取る。

未央「このアイドルグループが、大阪なら良かったですけどね」

石梨先生「どうして？」

未央「お母さんが言っていなかったですか？来年に仕事の都合で、私たちの家族が大阪へ引っ越すことを」

未央「ずいぶん前に言っていたわよ。ここに通うことが出来るのは今年が最後だって」

石梨先生、涼しげな顔。

石梨先生「未央のご両親は大阪の人で、二人とも地元に帰りたかった。未央は赤ちゃんの時から東京で暮らしてきたから、連れて行くのは心苦しいとも言っていたわ」

未央「……そんなこと、気にしていないですよ。東京に友達がいるわけでも無いから、未練は無いです」

未央、苦笑する。小さく息を吸い込む。

未央「先生はアイドルだった頃、高校生の時から一人暮らしを？」

石梨先生「私は埼玉出身だから、大人になるまで実家に住んでいた。だから申し訳ないけど、ホームシックはよく分からないわ」

未央「……別に、それが嫌だというわけではないですけどね」

未央、頬を膨らませる。

石梨先生「合格すればだけど、今回は大手の

事務所だから、今までのオーディションに比べて条件は良いわよ」

石梨先生、未央の方へ身を乗り出す。

石梨先生「それに、選考に有利に働くか分からないけど、プロデューサーも長い付き合いの人だから。」

未央、目を逸らす。息を吐き出す。

石梨先生「何か不安でもあるの？」

未央「周りにこのオーディションを受けていることがバレたら、面倒だなと思っています。フラフラしている私にも問題はありますけど、お節介な人ばかりですね」

未央、コップを持つ。手に力が入っている。

石梨先生「他の人の見え方は分からないけど、私の中で未央は意思がハッキリとしている子よ。それに、ピンチの時は周りに『助けて』が言えるし――」

未央、石梨先生を睨むように見る。

未央「抱え込み過ぎて失敗するのは嫌なので

コミュニケーション能力は低いし、経験値も少ないけど、それくらいは出来ます」

未央、ため息を吐く。

5秒ほど沈黙。

石梨先生「それで、どうする？」

石梨先生、壁に掛けられた時計に目を移す。

未央、何も言わずに部屋の中を見渡す。

未央「やる気とか、自信が無くても大丈夫ですよね？」

石梨先生「今更そんなことを？」

未央「確認ですよ。……やってみます」

未央、立ち上がる。

石梨先生、笑顔になって立ち上がる。

石梨先生「やったことが無い人は何とでも言えるから、気にしない方がいいわ」

石梨先生、未央に握手を求める。

未央M「やれやれ。面倒だけど、これで何とか丸く収まる」

未央、口を尖らせる。石梨先生と握手

する。

○同・玄関（夜）

照明が少なくて薄暗い。

バレエ教室の生徒と親が数人いる。

未央が一人でビルを出ようとする。

石梨先生が走ってくる。

未央、気配に気づいて立ち止まる。後ろを振り返る。

石梨先生「良かった。まだ帰っていなくて」

未央「どうしたのですか？」

石梨先生「ちょっと来て。未央にプレゼントがある」

石梨先生、手招きをする。

未央、石梨先生の後についていく。

○同・倉庫（夜）

ロッカーや棚が押し込められるように置いてある。

棚にはたくさんの段ボールが置かれて

いる。

未央、入口の近くに立っている。

石梨先生、奥から段ボールを抱えて歩いてくる。未央の前に置くとふたを開ける。

段ボールの中に、女性アイドルのグッズが大量に入っている。

石梨先生「あなたの先輩のグッズ。好きな物を持っていっていいわよ」

未央「大丈夫ですか？頂き物ですよね？」

石梨先生「同じ物がたくさんあるから」

石梨先生、鼻を押さえながら笑う。

未央、膝をつくと段ボールの中身を確かめる。ボールペンやノートを取り出すと横に置く。

石梨先生「未央が使わなくても、学校の男子にプレゼントしたら喜ばれるかもよ？」

未央「渡す相手がいないし、勘違いされたくないので」

未央、石梨先生から目を逸らす。

石梨先生、苦笑する。

未央、段ボールの底からポスターを一枚取り出す。開いて眺めるとため息を吐く。

ポスターには笑顔の女性が写っている。

未央「愛ちゃん――、大スターになりましたね」

石梨先生「まあ、彼女は別格だったから。」

石梨先生、得意気な顔で未央を見る。

未央、小さく息を吸い込む。石梨先生を見る。

未央「先生は、私がオーディションに合格すると思っていますか？」

石梨先生「それは分からないけど、先生は本気を出した未央が、何処まで行けるか楽しみだね」

石梨先生、段ボールを持って立ち上がる。

未央、苦笑する。顔を上に向ける。

石梨先生、倉庫を出ていく。

未央「タイミングが悪い――」

未央、ため息を吐く。倉庫の電気を消す。

○南台中学校・3年生の教室前の廊下（朝）

廊下には誰もいない。

窓は全て閉まっている。

階段の近くに赤いカラーコーンが置かれていて、「テスト中。お静かに」と書かれた紙が貼られている。

○同・3年C組の教室（朝）

座席は始業式の時と同じ。

教室は静か。生徒たちは緊張した表情で座っている。

木橋先生がテスト用紙を配っている。

翼、テスト用紙を後ろの席に座っている未央に回す。渡す時に微笑する。

未央、受け取ると微笑む。

木橋先生、教卓の前に立つ。周囲を見

渡してから腕時計を見る。

木橋先生「はい、テスト開始」

生徒たちが一斉にテストを始める。

未央、ペンを持つ手を止める。顔を上げて翼の背中を見つめる。

未央M「1年間だけの暇つぶしの相手。最初の頃は翼のことをそう見ていた。だけど、楽しみが全く無かった学校生活が、少しは面白くなりそうだったから、私はワクワクしていた」

未央、小さく深呼吸をする。顔を下に向けてテストを続ける。

○同・3年B組の教室（朝）

生徒たちが黙々とテストに取り組んでいる。

先生が教室の中を見回り、森田の横を通り過ぎる。

森田、テスト用紙を両手で強く握っている。身体が小刻みに震えている。

森田「ヤバい、詰んだ――」

森田、テスト用紙を静かに机の上へ置く。

（続）